

平成27年度第2回岡山市総合教育会議

日時：平成27年6月12日（金）

場所：岡山市役所本庁舎第3会議室

○司会 定刻となりましたので、ただいまから平成27年度第2回岡山市総合教育会議を開催いたします。

本日は、市長、教育委員長を初め、全員の御出席をいただいておりますので、岡山市総合教育会議運営要綱の第3条の規定により会議は成立しております。

傍聴の希望者がありますが入室を許可してよろしいでしょうか。

（「異議なし」の声あり）

○司会 それでは、傍聴を許可します。

＜傍聴者入室＞

○司会 それでは、協議事項に移らせていただきます。

議事の進行は招集権者である市長にお願いしたいと存じます。市長よろしくお願いたします。

○大森市長 まず、次第に沿って進めさせていただきたいと思います。

きょうは資料説明で、まずは、「岡山市の教育の現状と課題を踏まえた教育委員会の取組」、次に「わが国の教育の方向性と岡山市の状況」でございます。2つの資料がございますので、1つの資料説明が終わったときに若干の討議をさせていただきたいと思っております。

では、「岡山市の教育の現状と課題を踏まえた教育委員会の取組」の状況について教育長から御説明をお願いいたします。

○山脇教育長 ワンペーパーにまとめてあります。前回の課題から踏まえまして、教育委員会として、特に学力、問題行動に絞ったような形になりますが、教育側としてどのように考えて、どのような取り組みを行っているのかについて御説明させていただきます。

それでは、色刷りの一枚物を見ていただきたいと思います。

この資料は、左側が学力、右側が学校問題、問題行動になっておりますが、それについて数年前の状況、そしてこれまで取り組んできたこと、その結果として今の状況はどのようなのか、さらに今後はどのようなことを考えて、どのような取り組みをしようとしているのか、上から下に流れているような形でお示しをさせていただきました。

まずは、学力向上についての取り組みでございます。一番上の左側、全国学力・学習状況調査の結果から、岡山市立の小学校、中学校に通っている子どもたちは、自分の考えや意見を発表し、その理由をわかりやすく表現したり、示されたグラフや文章から必要な情報を読み取ったりする力、いわゆる表現力とか読解力の定着に課題がある。また、ほとんどの問題で国の平均より無解答率が高い、また粘り強く課題に取り組もうとする学習意欲にも課題があると考えております。これらの課題は、小学校、中学校ともに共通をしております。

さらに、予習、復習をするなどの家庭学習の習慣が身につけている児童生徒の割合が、国に比べて低いこともわかってまいりました。

この状況で、まず教育委員会として考えましたのは、一番にすべきことは授業改善であるということです。表現力、読解力を培うためには、子ども自身が課題について考え、根拠を持って話し合ったりすることを重視した、わかる授業づくりを進めることが重要であり、また、その中で学習意欲の向上や家庭学習の充実につなぐ手だてを検討することが効果的であるという仮説を立てました。

これまで、「中学校区ではぐくむ！学力アップ事業」に取り組んでまいりました。各中学校区で就学前から小学校、中学校の連携を強化いたします、岡山型一貫教育の推進をしようとするものであります。小学校、中学校という違う校種の教員同士が、授業で大切にすることや子どもの評価の観点などを共有して指導に当たることで、9年間を見通して、共通して課題となっている読解力、表現力の向上を目指すものでございます。

また、家庭での学習の仕方、学習習慣の定着を図る必要があるという考えで、家庭学習の事例集を作成いたしまして、家庭学習の定着を図ろうとしておりました。

また、さらに子どもの習熟度の違いから、授業や放課後に10人未満の小さな集団による個別学習を行う「習熟度別サポート事業」や、学習規律が子どもの習熟に影響するのではという考えで、小学校1年生が小学校生活の円滑なスタートを切り、学習の決まりが身につくように生活指導を行う指導員を配置する「岡山っ子スタート・サポート事業」にも取り組んでまいりました。

その結果、各中学校区でのこの岡山型一貫教育の取り組み、結局、小学校、中学校を含めてしっかり教員同士が話し合う、そして共通理解を図ろうという取り組みは活発になってきております。教職員の授業改善に取り組む意識も高まりつつあることは、アンケート調査等でもわかってきております。

一方で、全国学力・学習状況調査については、最近の結果を見ても課題であった読解力、表現力の定着には、いまだ十分な改善が見えてないのではないかと考えております。

また、家庭学習の状況について、改善傾向にはありますが、定着度はラインが低い。これに加えて、携帯電話やスマートフォンの使用時間が長い生徒の割合も国の平均よりは高く、家庭学習の定着に影響を与えていることも考えられます。これらのことから、これまでの取り組みでは授業改善を進める取り組みや家庭学習の定着を促進する事例集などの活用などの点においては、まだまだ不十分、徹底ができていないと考えております。

今後の取り組みとして3点、教員の授業力の向上、個別指導、家庭学習のさらなる定着化の推進に力を入れていこうと思っております。具体的には一括した事業になっておりますが、「岡山っ子学力向上推進事業」であります。

この中で、授業力の向上については、新規に事務局職員によりまして「岡山っ子学力向上チーム」をつくって、不十分であった全国学力・学習状況調査結果の分析を大学の先生とともにに行いまして、その分析をもとにした授業改善や各中学校区の一貫教育推進をコーディネートしていこうとしております。

主な取り組みとしては、授業では「めあての提示」。子どもが「考え・表現する場面の設定」「振り返り」のある授業づくりという当たり前のことを、全授業で徹底をしていこうと考えております。特にその授業の中では、自分の考えを持ち、クラスの友達とともによりよい考えを練り上げていくことを通して、子どもの読解力、表現力を高めていこうとしております。

2つ目、現場の教員とともに問題の解き方の解説を入れた算数プリントである「ますかっつとプリント」を作成し、朝の時間、また授業の中で使用して子どものつまずきの分析を行い、子どもにわかりやすい授業にしていこうとしております。

3つ目、学習指導力の高い教諭として配置をしております指導教諭が公開授業を行ったり、授業づくりの支援を行ったりすることで自分の学校だけではなく、周辺の、近隣の学校の教員の授業力も、それによって高めていきたいと思っております。

4つ目、教諭、指導主事を他県に派遣しまして、授業づくり等で参考になる好事例を市内にも今後広めていきたいと考えておるところでございます。

家庭学習の充実については、家庭学習の事例集の活用を推進するために教員研修を実施したり、保護者への啓発を進めていこうと考えております。加えて、スマートフォン

等の活用のルールを学校、保護者、児童生徒が話し合っ決めて、子どもたち自身が使用時間の見直しなどを行うようにしていこうとしております。

その他、岡山っ子スタート・サポーター、そして習熟度サポーター等の配置を引き続き行ってまいります。

次に、学校問題の未然防止、早期解決について。岡山市では平成21年度当時、児童生徒の暴力行為の発生率、不登校の出現率が小学校、中学校ともに国のものよりも高い状況でありました。また、いじめの解消率は小学校、中学校ともに75%前後でありまして、これも平均を下回ってございました。このような状況を踏まえまして、これまで不登校の兆候が見られる子どもに登校時の付き添いや別室登校などの支援を行います、不登校児童生徒支援員を配置したり、心の専門である臨床心理士等の資格を持っておられるスクールカウンセラーも学校に配置をして、問題行動等の早期発見、早期対応に努めてきております。

また、市で、教育相談室であるとか、不登校児童生徒の学校復帰を目指す適応指導教室も設置をいたしまして、社会的自立を含めて支援を行いまして、深刻化の防止に努めてきております。

その結果、中学校で暴力行為の発生件数が減ったり、小学校、中学校ともにいじめの解消率が上昇したりするなど、取り組みの成果はあらわれてきております。

一方、不登校については小学校、中学校ともに増加はしてきております。まだ減ってきてはおりません。課題が出始めてから、また深刻化してからの対応では根本的な解決にはならないと考えておりまして、今後の取り組みとしては、課題が出始めてからの対応に加え、生活の基盤である学級集団の改善を重視して、問題行動等の未然防止に努めることにしております。また、事業ごとの課題とか、そういうものについての検証を行い、より効果的な取り組みにつなげていきたいと考えております。

具体的な取り組みといえば、未然防止という観点からは、Q-U、アセスという学級という集団の中での適応感をはかる検査を活用して、よりよい学級集団づくりに生かすことをしております。

学級の適応感をはかる検査については、現在の状況が、六角形の図で示されております。その図を見ていただきたいと思っております。

早期発見、早期対応という観点からは、これまでの取り組みに加えまして、スクールカウンセラーの小学校への配置を充実、拡充をしていこうと。小学校段階での早期の対

応に努めていこうと考えております。また迅速に、継続的な取り組みが必要ないじめのケースに対応していくために、いじめ専門相談員を派遣できるようにしております。

深刻化防止という観点からは、解決困難な学校問題について弁護士や精神科医等の専門家や教育委員会の事務局職員が助言とか指導を行います、学校問題解決サポート事業を実施しております。

調査・検証という観点からは、問題行動等の対策事業としまして、問題行動等対策委員会を開催して、問題行動等の要因の洗い出しや対策についての審議、いじめの重大事案についての調査を行うことにしています。これは今日の新聞にも出ていたと思います。

不登校、問題行動等への取り組みも小学校と中学校の教職員が同じ考えで対応していくことが大切でありまして、小中一貫教育をその視点からも進めております。

次に、教職員の負担軽減。これについては第1回目にも説明をさせていただいておりまして、生徒指導、事務の時間がふえてきて負担感を感じていることであったと思います。そのために各種支援員配置であるとか、報告事務といいますか、事務量も削減に今努めてきております。

さらには、学校事務アシスト事業、また部活動サポート事業も進めていこうとしております。このことが、学力向上や学校問題の未然防止、早期解決に向けた取り組みを支えていくものと考えているわけでございます。

最後に、学力をつけることと問題行動等の解消を図ることは相関があると考えております。落ちついた学校生活を送ることで授業にも集中できますし、授業の中で認められ、学習していることがわかることで落ちついた学校生活ができる。お互いが離れたものではないと考えております。

また、学力の向上、問題行動等の解消には家庭、地域の方々などとの課題、または取り組みの共有が必要であります。そのために、学校運営に、保護者、地域の方々に参加をする仕組みである、地域協働学校も導入してきております。

以上で、これまでの取り組み、またこれからさらに取り組んでいくことへの考え方を含めた説明を終わらせていただきます。

○大森市長 今の説明に対して御質問、御意見をお願いいたします。

では、私が皮切りに。例えば、学力向上への取り組みの中で問題点を3点述べられます。どうしてこういう問題点が出てきたのか、分析はどうなっているのでしょうか。無解答率が高いということであれば、なぜこうなっているのか。学校にも、いろいろな

結果をもたらす要因があるかもしれない。先生にとってどういうことがあるのか、学校環境にどういう問題があるのか、そして保護者にもあるかもしれません。保護者の課題は、問題点は一体何なのか。地域といいますか、学力向上だとそれほど地域との関係はないのかもしれないですが、そういったところについての課題があるのかないのか、そういう分析はどうなってますか。

○山脇教育長 一番上の読解力、表現力もそうですし、無解答率も結果の数字としてはこうやって出てきているわけです。なぜかということについては、先ほども少し授業改善についてお話をさせていただきましたが、その授業が、例えば意欲づけになるような、次へのステップを生むような授業になっているかどうなのかとか、読解力、表現力についても、それを考える時間を十分にとった授業づくりになっているのかどうかということについては、教員から見たときの感覚的なものと言ったほうがいいかもわからない。そういう意味で弱いかわからないですが。

授業をやってみて、これは足りないんじゃないかと、データの分析をもとにした取り組みにはなっておりません。私自身も、無解答率が高いのはなぜかということ、子ども自身に解決した喜びがないんじゃないとか、わかった喜びが十分に味わえていないのではないか。そういうためにはどういう授業づくりをしていくべきなのかという発想の中で、これまで取り組んできました。

当然、意欲づけのためには、学校だけではなくて、市長さんから家庭ではどうなのかと、保護者はどうなのかということがあったりする。意欲を持って何でも取り組んでいけるような子どもとなりますと、座学だけでは十分でないだろうと思います。いろんな体験を積みながら、一つ一つの喜びの積み重ねといいますか、そういうものも味わわせてやらないといけないんじゃないかなと感じております。

データをもとにして、きちっとしているところが足りないんじゃないかなと市長さん自身も思われているところがあるんじゃないかと思いますが、今、取り組んでいる状況がそこです。今後、いかにデータ分析が必要なのかというところがあると思います。

○大森市長 私自身、定量的に把握できる部分が、それほどあるとも思えないような気はするんです。ただ先生の直感として、今までの授業はどうだったとか、子どもたちから推測できる保護者はどういう状況になっているのか、今、地域の方々が少し教えてくれたりしているケースもあるようですが、そういったものの効果はどうなっているのかとか。もちろん直接PTAの方、保護者の方、地域の方からもお話を聞く、感覚を聞くの

もあるでしょうけども、先生方もそういったことは子どもと接触をしながら、それなりに分析をされているのではないのかなという気がするんです。

それがどうなっているかとともに、ここの取り組みは、基本的には先生に対しての、要請を与えているということでしょうけども、他の要素は考えないのかなというのがあるんですが。

○山脇教育長 学力向上を図るために、一番に考えたのは授業は大切にしないといけないだろうと思います。それ以外にも要素はたくさんあるだろうと思うんです。子どもたちが、家の中で何か物事をやったらとしましょうか。それに対する保護者の方の反応がどうであるかというのも1つの大きな要因になるかも知れません。学校だけではなくて、当然、保護者の方、地域を含めて、地域で何か子どもたちが物事をやり遂げるようなこともさせる。そこで問題があれば、その中で解決活動を子ども自身が起こすことも、体験させてやることも必要だと思います。ここに絞っているのは、教師に向けて、学校に向けてのことだけで書き上げております。しかしながらそれを含むものは、今、市長さんもおっしゃったような、いろんな要素があると考えています。

○曾田教育委員会委員長 関連で、先ほど市長さんが言われた無解答率が多いとか家庭学習のこととか、定量的になぜこうなっているか調べられてないですが、全国調査の中で、無解答率が低い県、秋田であるとか福井が何をやっているかといったときに、書く指導にすごく時間をかけているデータは見たことがあります。そのことと無解答と関係あるのかどうかわかりませんが、この県の無解答率が物すごく低いことは言えていると思います。

好事例に学ぶということは、お互いのところだけじゃなくて、そういう県のいい取り組みも入れていかないといけないのかな、あわせて家庭学習は時間だけでなく、そのあり方も考えていかないといけないのではないかなと教育委員会では話したことがあります。

○大森市長 ほかの委員さんどうでしょうか。東條さん何かありますか。

○東條教育委員 無解答率のところだけに焦点化する必要ないのかもしれませんが、具体的な今後の取り組みとして家庭学習の充実が、左の下に指摘されています。今、教育長が指摘してましたように、これは主に学校ではこんな工夫をしましょうという話ですが、おうちに対して、そういうことをどういうふうに理解していただくか、かなり大事な要素になるんじゃないかなと思うんです。

無解答率に関して、これは失敗を回避する作業なので、失敗が今まで評価されてなかったということですので、失敗してもいいから頑張ってみようということは、学校の中だけでできることではありませんので、今、教育長も指摘されましたように、生活体験の中でそういうことをたくさんすること。

いろんな教室の子どもたちを見てみると、鉛筆を持って書くこと自体が既におっくうだという子が結構たくさんいるものですから、最初の構えが崩れているような子がいますから、そういう構えをつくり直す、学校とおうちで協力してつくり直すことから始めてみると、この部分に関してはもう少し粘り強く取り組める子がふえるんじゃないかという観測を持っています。

○大森市長 どうでしょうか。奥津さん。

○奥津教育委員 最初に課題が3点あるとあったが、意欲があって、学習をちゃんとやっている子もやっぱりいる。一方でできない、テストも点数が悪かったり、家庭でもほとんどできていなかったりする。全国に比べて割合の問題だろうとは思いますが。

そういうことを前提としたときに、教育委員会としてどこに重点というか、何を改善するのに力を入れるのか、目標にするべきなのかといったときに、できてない子とか、学習の習慣がついていない子。そういったところに焦点を当てて、そこをもうちょっとボトムアップしていくことも重点的にやっていくべきなんだろうなど。

全体の成績を上げる意味では、そういったレベルを全体的に上げていくのが最も重要だろうし、また成果があらわれやすいことではないかなと考えております。

○塩田教育委員 無解答率が低いのはずっと続いてきていることで、毎回これは気になる場所でした。岡山の子どもたちは先生に褒めてもらっていることを、すごく自分で感じているということがデータで出ていますが。やみくもに褒める、褒めて育てるという言葉がありますが、ただ褒めるんじゃなくて、褒めたときには次の課題を与えて、その与えた課題を解けたときに最大限褒め言葉を出すというふうにして、褒め方にも課題があるのかなと考えています。

岡山の子どもたちは少し冷めた部分があるとも感じているので、何か情熱を傾けられるような、みんなで頑張ろうというところが少し足りないのかなと思っています。

○大森市長 ほかにはどうでしょうか。何か今の話で教育長、教育委員会からお話いただけることがあれば。

○山脇教育長 ここは先ほど言いましたように、どちらかという学校でやるべきことで

お示しをさせていただいたところですが、例えば学力と食事の関係がデータとしてあるんです。朝食を食べている子どもと学力との相関とか、さらには生活習慣がきちっとついている子どもと学力との関係とか、そういうものが示されているところがあります。

ベネッセさんは今回、朝食との関係は何かあるんですよね。

○西島（ベネッセ） 本日お持ちしたものの中には入っておりません。

○山脇教育長 入ってないですか。

○西島（ベネッセ） 一般的には言われることです。

○山脇教育長 そういう意味で考えれば、今ここでお示ししていることは取り組んでいかなければならないことであろうと思います。それとともに、家庭なら家庭に対して、何が大切なのかというのが、例えば食事なら食事についても、きちっと家庭に向けての発信も要るんじゃないかなと思うわけであります。

○大森市長 今、どちらかという学力向上の点についてのお話になりましたけれども、学力向上の点についても教育というか、学校だけじゃないところで、保護者の問題が、このペーパーをそこまで整理していないだけでしょけれど、きょうの議論では欠落している。保護者にどういうことを求めていかなければならないのか、こういったことをやっていかないといけない。

その前に、学力向上の3点に絞ってありますが、この3点だけでいいのかどうかは別にして、一体何が問題となっているのかをきちっと分析をして、それぞれの主体ごとに整理をしていくことが必要なんじゃないかなと。

その中にはこの平板なことだけではなくて、今、奥津さんとか塩田さんがおっしゃられたように、褒め方とか情熱とか、そういう気持ちを、テンションを上げていくとか、そういったものって一体どうすればいいんだろうという話も当然ながらある。それは保護者の問題でもあるのかもしれないし。そういったことも考えなければなど。

また、好事例に学ぶと書いてあります。好事例って一体何なんだ。要するに我々のところで不足しているものが何で、今、委員長がおっしゃったように、書く習慣がついていないところが本当にあるのであれば、そこをターゲットに置いてやっていくことにしていけないといかんのかもしれない。もちろん、きょうは序盤戦の序盤なんでしょうけれども、そういう各論をこの中で議論していけないといかんような気がします。

あとは、問題行動も同じ。問題行動になると、もう一つ範囲が、主体の範囲が広がっていくような気もしますし、地域の方等々も入ってくるような気がします。それぞれが

何が問題になっているのか。暴力行為の発生率なんて一番高い、47都道府県で一番高いといってるのは、これは本当に大きな問題なんじゃないのかなと。それをどう分析して、これは誰が中心にということじゃないんでしょうね。学校もあるでしょうし、保護者もあるでしょうし、いろんなところがこの改善について努力をしていかないといかん。これをどうやってやっていくのかを、今後の議論にしたほうがいいのかと思います、どうでしょうか。

○曾田教育委員会委員長 確かに分析で、欠落しているとまでは言わないんだけど、欲しいと思うのは、岡山が縦軸と横軸で2つの大きなこと決めて、教育を進めようとしてます、地域協働と小中岡山型の一貫ですが。地域協働の中で、何年にもなるので、その中で育まれてきたことが学力やら暴力行為に、どういうふうに関係してきたのか、効果が上がっているのか上がってないのか、その分析はしたいなど、教育委員会でも何回か出ております。

ただ、どの要素を取り出したらいいのかまではまだ行ってないです。せっかく岡山らしいところで、地域の人と一緒に教育を育むということであれば、もう少し数字の上で出てくるようなことも必要なのかなと思っています。

○大森市長 ありますか、ほかに御意見。

○塩田教育委員 問題行動の話が出てきたんですが、これは本当に深刻だなどと思っています。現在、行われている具体的な取り組みが、症状を抑えているような対症療法と申しますか、そういった形だと思うんです。もちろん、問題行動を広げない、重症化させないという意味では、対症療法を行うことはすごく大切なことだとは思いますが、根本的に治療していかないと、いわゆる原因を究明して原因療法をやっていかないと、いつまでたってもこれは治らない、根治しないんじゃないかなと考えています。

今、行われている取り組みが、学校を中心とした取り組みが多いかなと、何となく切れているような感じがいたします。ですから、これは地域を越えて、友達関係とか交友関係は地域を越えて広がっているものなので、全市的な取り組みをやっていかないといけないし、そして先生方の情報共有の場も設けていかないといけないのかなと感じております。

○大森市長 塩田さんのおっしゃっている根本的な原因は、どういうイメージなんでしょうか。

○塩田教育委員 1つは、岡山は成人犯罪も多いと聞いています。そういったところまで

含めて、子どもだけの問題ではないと思います。少なくとも皆さん集まって情報共有をしていかないと、何が原因か突き詰めていけないと思うので、学校だけが抱える問題じゃなくて、市全体の学校でどういう問題があるのか情報共有をしていけば、何かそこに原因が見出されるんじゃないかなと。引いて言えば、成人犯罪に対しても、こういったことが原因になっているのかまでわかれば根治ができるのではないかと、難しい問題ですが。

○大森市長 では、とりあえず、きょうはベネッセさんに資料を用意していただいていますので、これからベネッセさんに説明をお願いしたいと思います。どちらにしても、一枚紙、とりあえず全体としてはよくまとまってはいると思いますが、要因分析、これから各主体ごとの具体策、今後そこは何度も何度も議論していかないといかんと思いますが、そういったことに一つ一つ整理をし、チャレンジをしていかないといかんのじゃないかなと思います。

多分、塩田さんのおっしゃった根本原因も、いろんな要素があるんだろうと。そう簡単に、はい、これです。これをしますというのは難しい話であって、一步一步それを前に進めていくことも重要だろうと思いますから、その分析を事務局、総務局、そして教育委員会、よろしくお願いを申し上げたいと思います。

では、ベネッセさんからの資料説明をお願いいたします。

○西島（ベネッセ） ベネッセコーポレーションの西島と申します。

本日はこのような場で、このような機会を頂戴いたしましてありがとうございます。地元岡山のために精いっぱい頑張っていきたいと存じております。資料はとじものでたくさんになってしまいましたが、お手元にあるかと思います。

テーマ本日4点、事務局様と打ち合わせをしながら決めてまいりました。本来はもっともっとたくさん教育課題があるかと思いますが、時間の関係もありますので、まずは4点に絞りまして、本日はお話を申し上げたいと思います。

まず1点目、今後の教育の方向性です。教育を考えるに当たっては、子どもたちが20年後、30年後に社会で活躍することをイメージしながら考えていかなければならないと思います。そのヒントといいますか、今の全体的な動きを少し整理をさせていただいて、本論に入っていきたいと思います。

4ページ、子どもたちは未来からの留学生と書いてあります。2050年前後には日本の人口1億人を割ったり、あるいはアジアの人口が段々減少に入っていく、つまり今はア

ジアと日本全体としても言っていますが、その後は恐らく世界的にはアフリカの時代に入っていく。今グローバル人材が必要だと言っていますが、恐らく2050年ぐらいには人間の処理能力を人工知能が超えていくと言われていいますので、コンピューターにできないことは何なんだということを、考えながら仕事をしていかなければいけない時代が来ると言われています。この時代を、今の子どもたちは社会に出て、働いていながら生活をしてる状況になります。こういった子どもたちに対して、どんな教育をしていかなければならないのかということで、さまざまな動きがございます。

次のページ、教育改革全体像として、国の方向性として考えているのがこの大きな3つです。

1つ目、「履修の評価」。この教科がちゃんと時間数出て、教科書も勉強しましたということで評価するのではなく、これができるようになりました、この力がつきましたということの評価しなければならないという考え方。左側にあります、「知識・理解」から「活用・創造」へ。先ほど申しましたように、「知識・理解」の部分はコンピューターに任せられる時代が必ず来ると、そのときにどうするんだということですか、あわせて人としてやれることは、人と人の力が合わさって、さらに大きなものをつくり出すことになりますので、一方向の知識注入型の授業ではなく、子ども同士、もしくは子どもと先生、あるいは子どもと外部の方々とのコラボレーションの中で、何がつくり出せるかという授業に変えていこうという動きがございます。

また、次のページでは、その動きやその考え方をベースに、今、学習指導要領の検討がなされています。そこにはOECDの、PISAの調査をやったりしておりますが、その考え方が強く影響してくると言われております。今、東京大学が主催している「OECDイノベーション教育ネットワーク」とOECD、文部科学省が連携しながら次の教育のあり方を研究しています。

OECDで、2015年度のPISAの2015が行われます。この中に新しく加わるのが、協働して何ができるのか、協働型問題解決能力が新たに加わります。これはどうやってテストするんだということになりますと、コンピューターで全てやってしまうということになりまして、コンピューターの中に出てくる人物、あるいは取り組みに対して、そのテストを受ける私がどういうふうに活動していくのか、動いていくのか、発言していくのかをはかりながら評価をしていくようです。そのように人と人のかかわりでアクティブに学んでいくことがこれからは重要だと言われていいますし、それを21世紀型能力

の育成の1つで重要な位置づけにされています。

次のページは時間の関係で飛ばさせていただきますが、右下だけ見ていただきまして、Skillと書いてます。21世紀型能力、さまざまな分類や考え方がありますが、OECDが考えているのは4つのCです。Critical Thinking、創造性、CommunicationにCollaborationです。このあたりをしっかりとやっていける人間に育てるための教育はどうしたらいいのかということが、今、OECDなどでは議論をされているところです。

次のページ、協働型の問題解決能力の枠組みで、OECDから出ているもので、訳語がこなれていないので恐縮ですが、ピンク、黄色のところだけを見ていただきましても、どちらかというと、学校の勉強ではなくて、私たち社会人がいろいろ考えをめぐらせるときに使っている言葉ではないかと思います。社会に出て子どもたちが活躍できるように、そういった考え方をベースにした教育に大、高、中、小と変えていこうというのが今の教育の動きかと思います。

そういう意味では大学では既に始まっておりまして、アクティブ・ラーニング、Future Skills Projectと書いてあります。これは私ども会社が仕掛けておりますといえますか、大学の先生方と一緒にやらせていただいております、大学の中に企業の方に入らせていただいて、大学生のプロジェクト学習を推進していくものです。これは大学1年生のときにやって、ガツンと言わせて、今までの教育、もちろん重要なことをやってきてますが、こういった協働型の学習はなかなか高校ではやっていませんので、大学で入学してすぐにグループをつくって、そこで企業から課題を与えてそこで成果を出せという、協働して成果を出せという教育をやるのを広げております。

例えば下にありますように、弊社の出す課題の例としては、東南アジアで事業を展開したけれども何をするかという、本当に会社で考えるようなことを大学1年生にやらせます。もちろん中身は問わないです。きちんと協働的に学習ができていないか評価するような大学の授業の仕組みです。こういったものが段々おりてくるということで、スーパーグローバルハイスクールが高校で出て、岡山県内でも何校かありますが、そういうところではこういった活動をしていくことになります。

ただ、高等学校、中学校は、こういったものが実は余り進んでおりませんで、どちらかというと、今、大学の次には小学校が進んでおります。これはICTと関わっておりまして、ICTの活用、タブレットをイメージされると、1人1台持ってドリルを解いて黙ってやっているイメージもあるかもしれません。もちろんそういった取り組みもあ

りますが、各自治体様でタブレット導入する一番の主眼としては、アクティブ・ラーニングをやりたいということが中心になっています。

何がいいかといいますと、通常、教室の中で、授業の中で子どもたちに考えさせ、あるいはグループで話し合わせ、それを発表するという活動をされますが、そのとき先生から見えるのは発表だけです。もちろん回って行かれて、個々の子どもたちの書いていることや考えていることは聞かれますが、でも残るのは発表だけになってしまいます。そうではなくて、みんなが発信できる場をつくり、みんなが発信したものを先生がきちんと丁寧に受けとめて、それを次の授業に生かしていく構造ができるのがICTのいいところです。そのような活動を推進していきたいということで、ICTを導入され協働学習をやっていきたくて動いてらっしゃるところがふえてきているところでございます。

このように変わってきている教育ですが、教育制度に関するスケジュールで、今、中教審で検討されております、指導要領の改訂が2020年あたりで始まりますとともに、下に矢印で2つ書いてありますが、いわゆる大学入試の改革、大きな改革がこの年に参ります。したがって、これは現在の中学1年生が受ける大学入試になります。

これも今まで申し上げたお話と流れは同じです。社会に出て使える力をしっかり大学入試でも問いたいという考え方です。非常に難しい話ではあるんですが、今のセンター試験、どちらかという知識の記憶再生を問う問題が多いですので、それを全面的にやめて、センター試験的なものをつくるんですが、それを下の大学入学者選抜テストの希望者学力評価テストと呼び、その中でも思考力・判断力・表現力を中心に評価するようなテストにしていきます。それがセンター試験的な全国一斉のものです。

それを先ほど言いましたように、できればCBTというコンピューターをベースにした、PISA2015で申し上げたようなものにしていきたい。まだ、環境は整わないかもしれないので、すぐすぐはいかないかもしれませんが、方向性としては単純に再生するのではなくて、どう行動するか、どう考えるか、プロセスを評価するテストにしていきたいという考え方です。

それとともに、各大学ではそのテストを踏まえながらも各大学ごとに、主体性・多様性・協同性等を面接ですとか、これまでどんな活動をしてきたかとか、多面的に評価をするような仕組みにしていくと変わってまいります。大学としては非常に採点どうするんだとか、面接全員するのかとか、さまざまな問題がありますので、非常に困難はあるんですが、国としては必ずやり抜くと。入試が変わらないと教育が変わらないというこ

とでやっていらっしゃる場所ですので、100%ここまで行けるかどうかは今議論をしているところですが、方向性としてはこの方向に行くという形になります。

したがって、岡山市にはどちらかというと小、中学校を中心の学習では、教育について議論をされる場ではあると思いますが、このあたりをしっかりと見据えて今の中学1年生が、5年後6年後にどんな力を求められているんだということは意識しながら考えていかなければいけないと思いますし、恐らく私、小学校、中学校回らせていただいて、お先生方とお話ししても、大学入試改革のことはほとんど御存じないですので、そういったことも認識しながら今の子どもたちに対して、どういう教育をしていくかを考えていかなきゃいけないと思っております。

前置きが長くなりましたが、今度は問題行動で、14ページにデータを置いています。いじめですとか不登校ですとかさまざまな課題がありますが、先生方がどれだけ把握するか、県のデータが公開されてますが、いろんな県によって判断基準が違ったり、認定の気持ちの入れ方といいますか、そういったところが違ったりする場合がありますので、ここでは病院で治療を受けた、つまり学校で閉じた世界ではなく外の方も認識した、病院で治療を受けた暴力行為の数字で限定して分析をしてみました。

全国データの県ごとのデータは、これは小中高のデータしかなくて、小中高合わせた数字になっております。岡山市に関しては教育委員会様から御提供いただきましたので、小学生、中学生のデータになりますので、単純に比較はできないですが、グラフを見ていただきまして赤い太い線が県のデータで、ほかのぐちゃぐちゃとなっておりますところが他県のデータです。御承知のとおり、こんな位置にあると。もちろん下がってきているのはいい傾向であるということは言えると思いますし、岡山市としても、これは小、中のデータですので、高校生が入っていないので単純に比較はできませんが、岡山市で言いますと、県全体で考えると高校生を抜き、岡山市の外を抜いたら結構高いという感じかと思えます。

1万人あたりの発生件数です。さらに少し細かく年次ごとに見たのが右の表になります。岡山市の小学生、ここはそんなに高くない数字で安定しているんですが、平成25年度は少し上昇傾向にきており、そのときの1万人あたりの発生件数は9人と。1万人当たり9人と言ったら非常にわかりにくいですが、1,000人当たりで1人ぐらいですので、学校に300人ぐらいいるとしたら、三、四校の小学校に1件という感じです。9という数字を左のグラフに当てはめていただきますと、全国的に見たら、そう低くはない

ですね。小学生だけを取り上げててもそう低くはない状況かと思います。

中学生は非常に大きくて、中学生の数字が全体に影響を与えていると言えるかと思います。1万人当たり54件ですので、1,000人当たり5件、200人当たり1件ですので、1校に二、三件ある感じでしょうか。学校数が45校だったと思いますので、1校当たり113ですと、二、三件の病院で治療を受ける暴力行為がある状況です。決していい状態ではないと思います。

ではどうするのかですが、次のページです。岡山県よりも大きく低減されているモデル県を考えてみようということで、岡山県よりも香川県が最初はスタート時点で高いですけども、順調に下がっていったグラフが見えます。香川県は何をされているんだろうと見てみましたところ、さまざまな学校の取り組みをされていると思いますが、県としてこれをやったことが影響が大きかったと言われているのが、「かがわ青少年育成支援ビジョン」を策定し、それに基づいた「かがわマナーアップリーダーズ」という中学生を集めてさまざまなことを考えてもらい、それを学校に持って帰って学校の中でもさまざまな活動をしてもらう、あるいは町に出ているいろんなことをしてもらうことで、中学生を主体にした動きをしているところが大きかったようです。

グラフにありますように、これをスタートした年から一気に下がっていったということで、決して大人からの指導や押しつけではなく、子どもたち自身がどうしたいんだということを考え発信できる、それを引き出すような活動をしていくことはとても大事なことなんじゃないかなと思います。しかもそれが学校の中で閉じられたものではなく、警察の方や大学の方も含めて、県全体でそれを支援していくところもポイントかなと思います。

次のページ、香川県、学校ではどうなんだというところで見えていったものになります。これは全国学力・学習状況調査の中学校の学校質問紙を経年で見て行って、香川県の学力・学習状況調査の全項目の中での、学校質問紙の全項目の中での変化が、先ほどの減り方の変化と同じように変化しているものはどれか相関を見たものになります。香川県の学校質問紙と香川県の減り方の相関です。

それを見たときに、ここに挙がっているような項目が同じような形で、相関が高い形で、この取り組みが上がっていくと、学校での取り組みが上がっていったのと、暴力行為が下がっていったのが相関があります。相関ですので因果関係ではありませんが、一個一個を見ていくとどういうことだろうとなるかもしれませんが、ここの出てい

る相関が高いものを全体像で見えていただくと、学校としてこんな学校になってると下がってるんだなという見方ができるかなと思います。

ポイントは地域とのかかわり方です。上3つ全て地域です。4番目は、校長先生が授業を見て回っているところも相関が高かったりします。職場体験も地域ですし、学習規律のところ、先生同士が協力し、あるいは全職員の間で共有しという形で、クラスで閉じない、あるいは学校で閉じないところが1つのポイントかなと思っています。クラスの中で閉じてしまうことで、さまざまな課題が解決できない。そこに校長先生が入って来られる、あるいは先生同士で学習のことも含め、教育目標のことも含め、ちゃんとオープンマインドで、そういう時間もつくりながら共有をしていくところが大事なところかなと思っています。

ちなみに、地域のかかわりで言いますと、このデータではないですが、私がこれまで見てきました、いわゆる荒れている学校で改革をしてこられたところでは、判を押したように挨拶と掃除です。必ずここがスタートになっていて、しかも掃除は学校の外をするのが大きなポイントだと言われます。外を掃除して、地域の人が通られたときに、「いつもきれいにしてくれてありがとう」という声をかけてくれる、そんなやりとりの中で掃除をすること、あるいは人のために何かをすることの大事さといいますか、いい気持ちといいますか、そういったことを体験しながら少しずつ気持ちが落ちついていって、学校も落ちついていくと言われています。先ほどの香川県のこともそうですが、子どもたちから動けるような仕掛けを、ルールをどうこうではなくて、つくっていただけるのがいいかなと思っています。

続きまして、学力向上のために、ここも大量になりますが、ざっと御説明させていただきます。何かございましたら、後ほど御質問いただければと思います。

18ページ、岡山市の小学校の状況で、これも教育委員会様から御提供いただきましてありがとうございました。小学校はほとんど誤差に近いといいますか、余り大きな差がないと見ていいかなと思っています。無解答のところも書いてありますが、比較的多いのは多いですが、国語Aでもそう多くはないかなという感じです。ただ、中学校はかなり厳しい状況で、平均正答率でも、無解答率でも、非常に全国に比べて厳しい状況です。

では、どこにそういった厳しさの原因があるのか、あるいは学校の指導としてどうなのか、次のページからです。20ページ、21ページは、これは岡山市のデータではなくて、

全国のデータになります。全国の質問紙の項目と教科の成績の相関が高いのはどれかピックアップしたものです。教科にかかわらず相関が高いもの、国語、算数、あるいは数学に分けて入れております。ここも一つ一つは触れませんが、こういった相関が高いもの、こういう取り組みをしているところは学力が高い、その取り組みは岡山市としてどうなんだということを見ていきたいと思えます。

22ページ、この後の分析は4層分析をベースにしております。全国の100万人程度の受験者を4分割して、成績によって4分割した4層分析をベースにしております。23ページですが、赤い線が岡山市、A、B、C、Dと上から順番にその層が並んでいます。今、岡山市とB層が重なっているのがごらんいただけるかと思えますが、つまりBとCの間ぐらいが全国平均です。Bと重なっているということは全国平均よりもいい動きを子どもたちはしている。

例えば小学校の質問紙ですので、算数の授業の内容はよくわかりますかと聞かれて、「はい、わかります」と答えた子どもたちの割合は全国よりも高いと言えます。したがって、この相関が高いと先ほど御紹介したものの、横に並べている項目については、比較的ちゃんと子どもたちは学習してますし、もちろん先生方も指導されていると言えらると思えます。

では、次のページ中学校です。中学校も同じです。子どもたちは、ちゃんと素直に先生方の御指導を受けとめているのが平均的な姿であると言えると思うんです。では、なぜ無解答率が多いのか、あるいは、なかなか正答率が上がらないのか、次の25ページです。これは無解答の裏返しになりますが、国語の解答を文章で書く問題に最後まで解答を書こうと努力した割合で小学校、中学校。算数、数学で小学校、中学校とあります。

小学校はBとCの間ぐらいに大体位置していますので、全国平均レベルかなと。若干下ですが。ところが中学校になりますと、中学校の国語はC層の平均よりも下になってしまう。ほかのことはきちんとできているんですが、この質問に対してだけはC層より下に行ってしまう。最後まで書こうと努力していない状況になるということです。

これはなぜかということですが、そこまではデータがなかなか掘れずに、この後は定性的な情報になりますが、ある先生からお聞きしたところで、例えばこれは小学校の問題だったんですが、五十歩百歩という言葉の意味が何か過去に出たことがあるんですが、うちの学校はほとんどできなかつた。五十歩百歩ですので、同じレベルであるということですが、大きな差があると答えた子どものほうが多かつた。いわゆる言語体験が非

常に浅いと。

ほかのお話で、本文から引用されているこの何々という問題があったときに、引用という言葉の意味がわからずに結局書けなかったと。引用って何なの、うちの子どもたちは知らなかったと聞きました。つまり、基本的な言語体験が非常に浅いといいますか、薄いといいますか、そういう状況ではないかなと。

ですので、例えば普通の計算問題ですとか、ちょっとした答える問題でしたらある程度は答えられるんだけど、いわゆるB問題で、しっかり読み取らせて、考えさせて表現させるようなものになると、読み取りの部分、考える前でつまずいて、もうできませんとしてしまっている子どもたちが多いのではないかと推測されます。ということは、やはり言葉の意味や言語体験をしっかりやっていく必要があるのが1つです。

あと、もう一つお聞きするのが、言語活動をしっかり充実させましょうと現行の学習指導要領で言われていますが、いや、そんなことは今でもやっている。作文はいっぱい書かせるし、発表会いろいろやらせるし。いや、違いますと。今の学習指導要領で言っている言語活動ではなく、しっかり考えたりとか、根拠を持って発表したりとか、そういったことをしっかり考えさせないといけないということが、今の多くのB問題ができない学校では足りないんだと言われます。考える、あるいは根拠をしっかり持つといった、そういったプロセスが少し足りていないとよく言われます。

次のページ、秋田県、福井県、先ほどのお話しもありましたが、比較をしてみたものです。岡山市が上回っていた学校質問紙の項目、秋田県、福井県が上回っていた項目を整理をしてみました。言語活動の話、秋田、福井ともに岡山市よりも高いです。小学校、中学校ともに。言語活動について全教職員間で話し合っけて検討している。学校全体として取り組んでいる。このあたり、先ほどキーワード、やはり先生間の共有みたいなところがあります。学校全体として言語活動ってどういうふうにするんだと。単なる作文じゃだめなんだと、発表じゃだめなんだと。何を考えさせるかが大事なんだということを、学校の中で議論されている率がかなり岡山市は低いんじゃないかなと思われま

す。もう一つ、今の言語活動の1つ上も共通してますが、全国調査の結果を分析して具体的に反映をしていくところも、かなり大きな差がございました。もっと言いますと、岡山市の場合は、それを学校全体で反映させている質問項目がもっと低いです。やはり学校全体で何かをすることがなかなかやりにくいのか、難しい環境があるのかなということ

次のページも秋田、福井と比べてみて、例えば家庭学習ですとか、全国調査の活用ですとか、観点をそろえてやっております。1つだけ触れさせていただきますと、国語、算数、数学の課題、いわゆる宿題です。これについては、岡山県はかなり高い数字で、秋田県は余り宿題を出してないんです。ただ、秋田県は復習、予習をちゃんとやるんです。宿題じゃなくて。宿題は低いです。岡山市は与えています。福井県は与えてもいるんですけど、与えた上で、その課題に対してちゃんと評価をしてあげて、それに対する指導までしますということで、そこに差がありました。

家庭学習をどこまで先生がマネジメントされているか、宿題を出して、もちろん宿題を出してちゃんとやってくるころは見てらっしゃると思いますが、それが身になってるのかとか、うちの子どもも小学生のときには、宿題やったら保護者の判こを押すことがありました。その判こを自分で押してないかとか、そういうのも含めてちゃんと自分の力になってるかまで見ているのが福井県であると言えます。ここだけ触れさせていただきます。

次のページからは、ずっと今申し上げたようなことの学校質問紙の元資料ですので、またお時間のあるときにごらんいただければと思います。

次は36ページ。山口県、愛媛県を拾っております。この数年の全国調査で右肩上がりに上がっている県はどこか見たときに、出てきた2つの県です。山口県はさまざまな取り組み、本当に全国調査が始まったときから、本当にこれはまずいということでさまざまな取り組みをしてこられております。さまざまなことをやっていますが、一番大きかったのは（5）高校入試の問題を大幅に変えたところが一番大きかったようです。

岡山県の県立高校入試も国語の問題、大分B問題色が入ってきていると思います。入試を変える、さっきの大学入試の話ではありませんが、入試を変えることはすごく大きなことになっていくだろうなと思いますので、これはぜひ岡山市ではございませんが、岡山県としてそういった働きかけもしていったらいいのではないかなと思っています。

愛媛県は数学Bが物すごく右肩上がりで伸びてます。ここのポイントは最後の省察力で、PDCAをちゃんと回すということです。確認テストを定期的に全県でやっていき、あるいは全県で学力診断調査をやって、その結果をもとに学校の評価改善を充実させていく。その中で、先ほど岡山市さんの取り組みにもありましたが、授業のエキスパートみたいなところを高めていくことをやってらっしゃいます。組織でちゃんとPDCAを回すところが大事かなと思います。

次のページ、今度は教員の負担の実態で、御承知のと通りの数字が数ページ並びます。小学校の場合は、若い先生がかなり休日出勤もされながら、学校で働いている時間はこの数年伸びていますし、次のページの中学校は、部活の顧問をされているとかなりの長時間労働です。

次のページ、これはTALISといたしまして、OECDが国際比較をしている先生方の業務の状況についての調査になります。これも報道されましたので御存じかとは思いますが、日本が仕事の時間は一番長いです。授業時間はほぼどの国も変わりません。それはどこに原因があるかという、先ほどと同じで課外活動と事務作業で他国とは大きく違います。

次のページは同じTALISですが、先生の自己効力感を見てみると、圧倒的に低い自己効力感になっています。これはもちろん国民性として、もっともっとできるのに自分はと思われている、もっともっとやりたいのにと思われているところに対する評価であったりしますので、能力的にこうだというわけでは全くありません。なぜそうになっているのかと、自己効力感が高まらないと生きていく上で、私たち誰もがそうだと思いますが、前向きに頑張っていけないところがありますので、そこはきちっと見ていかないといけないだろうなと思います。

なぜそうになっているかで、次の教職の魅力です。これは弊社の調査になりますが、先生方はここに書いてある、特に赤線で引いているようなことをやりたいと思って先生をされている。子どもの成長をしっかり見ていきたいし、関わりたいと思っています。ただ、それができてないからこそ、先ほどの自己効力感の低さになるかと思えます。

どんな悩みがあるかということで、次のページになります。左側が小学校の先生、右側が中学校の先生で、整理し直しておりますので46ページをごらんください。先ほどの教員の悩みを小学校先生の上位5項目、中学校の先生、同じポイントがあるので上位6項目を並べております。これを整理をしてみると、事務書類の多さ、それから子どもたちの学習意欲がなかなか上がってこないとか、中学校の先生から見たら小学校での学習内容が定着していないとか、特別支援の必要な子どもさんがふえていること、そういったことの中でなかなか時間がうまく、思ったとおりにとれないし、先ほどありました教師の魅力を支えている、子どもの成長にしっかり関わることができていない状況のようです。教材準備の時間不足や休日出勤残業の発生で、表面化しております。

ですので、課題としては事務処理の多さや、小学校、あるいは前の学年、あるいはそ

の学年そのものも含めて、学習内容をどう定着させていくのか、それは学校だけでできるのか。先ほども議論の中でありましたが、地域の方も巻き込んでどうやっていくのかというあたりを、きちんと環境をつくっていったあげることが大切かなと思いますし、特別支援の必要な子どもさんについては47ページにグラフをつくっておりますが、本当に年々ふえている状況であります。右側のグラフでいきますと、特に岡山市様からいただいたデータでいくと、角度が全国より急な角度になっている。この数年、全国よりも急な角度でふえている状況でありますので、ここに対する何らかの御支援が必要なのかなということもあります。

最後の話題になります。先生の年齢構成で、これは第1回の会議の資料を拝見いたしました、そこにも出ておりましたので、ちょっと違う観点で申し上げますと、49ページです。講師比率です。たくさんの先生がやめられると、たくさんの先生を採用するけれども、まだどうせ子どもが減るんだから、本採用にせずに講師にしておこうという力学がどうしても働くんです。それによって県ごとに見ると講師比率が高いところがあります。講師比率を、都道府県でまず比較をした表の中に、岡山市様の現状の講師比率と、県と市の関係もありますので、単純にほかの県と比べてはいけないとは思いますが、一応、入れております。

小学校の場合、これらの県が講師比率が高い状況、赤い網かけをしているのは、これは全国調査で31位以降の都道府県、大まかに47を3つに分けたときの、3つ目のブロックに当たる県には赤い網かけをしております。半分ぐらいの枠に網がかかっているかと思えます。つまり、小学校の講師比率の低い県を見ると、半分ぐらいのところ、3分の1のあたりに位置づいているので、多少の影響はあるのかなと思います。その中で、岡山市様も講師比率は比較的高いほうに位置づいているということなのです。

中学校は、同じように見たときに、赤い網かけが圧倒的に多いです。講師比率が高いところは、3つに県を分けたときには、どうしても3つ目の層にどうしても当たっていることが言えるかと思えますし、岡山市も現状ここにいらっしゃる状況です。先生方の育成研修も当然必要ですが、それ以外の環境整備も考えていかないといけないのかなと思っております。

長い説明になりました申しわけございません。

以上でございます。何かございましたらぜひお願いいたします。

○大森市長 非常に示唆に富む御説明資料だったと思います。皆さん何か御意見、御質問

ございましたらお願いいたします。

皮切りに私から。これは一度じっくりと読んで、またいろいろとお伺いしたいと思いますが、1つに先ほど塩田委員がおっしゃった情熱といいますか、勉強をしよう、学校生活を充実させよう、いろんなモチベーションがありますよね。そういう点に関していうと、それを上げていくきっかけ、動機づけ、そういうものもまた別途あるでしょうね。

○西島（ベネッセ） あります。子どもたちのモチベーションということですね。

○大森市長 そうそう。

○西島（ベネッセ） 本日はお持ちしておりませんが、そういったデータもございまして、1番のキーワードは内発的動機づけ、おっしゃる動機づけです。外発的動機づけ、例えば入試ですとか、あるいは何かあげるからというところでやると学習は長続きしませんので、みずからの気持ちとして、何かになりたいとかそういうことももちろんいいんですけど、そうじゃなくて目の前の課題をちゃんとクリアしていくことに喜びを感じられるような動機づけをしていくのがとても大事で。

動機づけは基本的に保護者がやらないといけないことが多いですが、例えば家庭学習の中で算数の勉強をしていくときに、解き方を教えるとか、そんなことももちろん大事ですが、算数の勉強はこういうふうにして、将来にわたって続いていくものだから、ちゃんと積み上げていくんだよという算数の構造を教えてあげるとか、そういうことをやっていくことによって、自分もちゃんと成長していこうという気持ちが高まっていったりするらしいです。どういう働きかけをすれば内発的動機づけができるのかもまたデータがございしますので、それはまた改めてお持ちしたいと思います。

○大森市長 よろしく申し上げます。

私そういう要素があるのかなと思ったんですが、このアクティブ・ラーニング、Future Skills Projectは、要はICT、これからIT社会でよりそういう要素が強くなるだろうと、そういうのを早目に学ぼうじゃないかということでしょうか。それとも、このICTを使うことによって、より他の分野も合わせてこういうアクティブに対応ができていくということでしょうか。

○西島（ベネッセ） Future Skills Projectでは、ICTは関係ありません。これは本当に普通に授業のような、講義のような形で会社の方が来られて説明をして、もちろん学生は自分でパソコンを使っていろいろ調べたりすると思いますが、ICTを前提としたものではありません。アクティブ・ラーニング自体はそれでももちろんできますが、

次のページにあるICT活用に関して言うと、ツールとしてのICTを導入することによって、たくさん子どもたちが何を考えているか、ちゃんと見える化できる利点があるところです。

それとともに、これはOECDとしては言わずもがなという位置づけですが、当然コンピューターは全員使えるようになるのが当たり前だという社会になるので、子どもたちも当然、学校教育の中でコンピューターを使うんだという位置づけをされています。

○大森市長 みんなが使うのが当然として、ここでの効果はどちらかというと、例えば35人いるとすれば35人が先生の問いにどう反応したか、それが見える化といいますか、一遍でわかると、そういう効果を期待しているという理解をすればいいわけですね。

○西島（ベネッセ） そうですね。もちろん35人分の情報を整理しなければなりませんので、その整理はコンピューターは得意ですので、そういった利便性があるからこそ使うんだという位置づけです。

○大森市長 了解しました。

○曾田教育委員会委員長 お尋ねなんですけども、データがあればと思うのは、先ほどの意欲に係るんですが、これが学級適応力とか学習適応力とか、岡山市でもクモの巣チャートの中に低いところで載っているんです。これと学力との相関関係がわかるデータはお持ちでしょうか。

○西島（ベネッセ） 今、すぐに思いつくものがございませんが、探してみます。申しわけありません。すぐにこれですというのが申し上げられません。

○曾田教育委員会委員長 関係があるかなという予測的なものですが、これが多分問題行動へも発展していくのかなという感じがしております。

もう一つ、先ほどのアクティブ・ラーニングのところで、プロジェクト学習的なことは、例えば10年ちょっと前だったら杉並の藤原先生が、中学校で「よのなか科」を始められました。あれが今の学力状況調査のB問題につながっていったのかなと思いがら聞いたんですが、こういうのが今後の子どもたちに必要な、人材として必要な能力かなというところで、あそこからつながっているのと考えていいんでしょうか。そして、さらにこれは公で言うものではないけれども、ああいうところの中学校が、その学力は高くついているんでしょうね。ちょっと言いにくいですね。

○西島（ベネッセ） まずは、あの流れと同じでございます。もちろんそういった指導をされれば力はつきますが、校長先生も大分代がわりをされていて、あの学校で継続的に

あの取り組みをされているかは把握していませんが、継続的にやっていたらもちろん力はつくと思います。ただ、今、そこをついた力をどうやってはかれるのかというところがないのが非常に難しいところで、B問題ではかることもできるかもしれませんが、B問題も結局教科の問題に落とし込まれていますので、どういう力がついたかはかるための研究は、今、文科省でやっているところです。まずは、力の軸を明確にしなければいけないので、その辺を今考えていращるみたいです。

アクティブ・ラーニングの基本的な位置づけとして、目指す力は先ほどの7ページにあったCritical ThinkingとCreativityとCommunicationとCollaboration、これらをしっかりとつけていこうとかなり強く言ってますので、こういった力がはかれるような何かをつくっていく、それがモデルとしては2015年度もPISAの問題になるかと思ってます。

○曾田教育委員会委員長 そのときに、「よのなか科で」やってたことは、多分内容だけじゃなくて、さっき言われた学校を閉じないことにつながったのかなと思って聞かせていただきました。岡山市の学校も閉じないという気持ちはあるんですが、まだそこまでオープンになっていないので外部人材が入ってくるとか、よその知恵が使われるとかいうことがまだまだ足りないのかな。それと先生方の負担感が、最初のところでは増すかもしれないけど、最終的にはクローズしないところで、子どもたちにつく力は本物になるのかなということで聞かせていただきました。

○西島（ベネッセ） 関連して申し上げますと、横浜市さんが、きのうかおととい見たニュースですが、地域人材を募集されていて、さまざまな専門能力を持った人で学校に教えに来てくれというので登録してくれというのがありました。いわゆるボランティアではなくて講師として来てくれというのがありましたので。多分、今申し上げたように社会とのつながりとか、地域とのつながりを意識しての学校教育の変革の1つかなと思ってます。

○大森市長 そのほかどうでしょうか。

○奥津教育委員 データの見方ですけど、16ページの問題行動の相関係数が、さっきのどと、毎年の変化とそれぞれの項目との変化の相関だと聞いたんですが、もうちょっと詳しく、相関係数も含めてどういうふうに見ればいいのか教えていただけたらと思います。

○西島（ベネッセ） やったのは、全ての学校質問紙の項目を並べて、そのデータを4年分並べていきました。香川県のです。そこに前のページの暴力行為に関するデータを並

べ、この変化と近い変化をしているのがどれか、暴力行為のデータの並びと相関が高いのはどれかで相関係数を全部についてつけていって、それを並べかえて、相関、逆相関になりますので、マイナス0.9899が一番相関が高かったと位置づけて見ているところです。

○奥津教育委員 そうすると、1だと全く重なってしまうというわけですね。

○西島（ベネッセ） そうですね。

○奥津教育委員 1に非常に近いから、ほとんどグラフとしても同じような動きをしてる。岡山県は、結局その岡山県の数字を入れた。

○西島（ベネッセ） 香川県を見てみたときに、高いものがこれだけの項目がありました。それについて岡山県はどうだろうと見た。

○奥津教育委員 わかりました。

○塩田教育委員 それに関して、少し短絡的ですが、例えば香川県が問題行動を低減したところで、学力なんかに変化があらわれたところはあったんでしょうか。

○西島（ベネッセ） 残念ながら余り明確には出ていないです。

○塩田教育委員 先ほど内発的動機づけの話聞いて、モチベーションを上げるのにすごくいい方法だなとは思ったんです。これってすごく難しいと思うんですね。家庭でお母さんがやるのは。

○西島（ベネッセ） そうですね。算数とは何ぞやという話をしなければいけないのは難しいと思います。

○塩田教育委員 すごいスキルになると思います。岡山市の子どもたちは、夢を持っている子どもの数が、割合が少ないのがあったと思うんです。Future Skills Project、大学で別だとおっしゃったんですが、子どもたちに夢を持たせるようなプロジェクトみたいなことは、どこか行われているところはありますか。

○西島（ベネッセ） 自治体では余り聞いたことがないですが、最近、塾的なところでやっているのは、東京なんかで幾つか出てきたりしています。エリート教育的な感じですが、正直言いますと。本当にいろいろな実験をやらせたりとか、ロボットをつくったり、そんな中で夢を育ていこうみたいなふれこみで子どもたちを集めているのはありますが、学校教育ではなかなか聞いたことはないです。

あとは、新潟県長岡市で夢をつくるではないですが、エリート教育とさっき言っただけですが、地域のリーダーになる子どもたちを育てようと、小学生を全市から集め

て合宿みたいな形でやって、企業の方に来てもらって、5日間ぐらい合宿をしながらいろいろな夢を語り合ったり、いろんな体験をしたりやってリーダーをつくるみたいなことをやってらっしゃったりしましたので、そういうのが1つの志をつくる場になるのかなという気がします。

○大森市長 今の大河ドラマで、吉田松陰が、あなたの志は何ですか。そういうことなんでしょうけど。済みません、関係ありませんでしたが。

ほかにどうでしょう。教育長。

○山脇教育長 私もアクティブ・ラーニング、最初言われたところ、また、これからの教育の方向を考えたときにも、アクティブ・ラーニングが大変大切になってくるだろうと。先ほども言われました、ある面では問題解決という学習につながってくるんだろうかなと私自身は理解しているんです。

そのときにICTの活用についても、本当に子どもたちの思考の過程を見ていこうと思うときには、こういうものはすごく有効なんだろうと。先ほども出ていた、発表の場面だけ見るのではなくて、子どもたちが何を考えて、先生がそこへ全部集約できるわけですね。それによって、そういうものを見ていくという面では有効な手段とも言えるかなと。このあたりについても、今後、アクティブ・ラーニング含めて考えないといけないところがあるのかなと、ちょっとヒントをいただいたと思います。

それから、20ページから学力と関連の高い児童生徒の質問紙事項が出ているが、これはここに出ている項目が、学力的にも高い数字として出ていますよということ。

○西島（ベネッセ） 全国のデータの分析をした結果、ここの項目、例えば国語の授業の内容はよくわかりますかに、イエスと答えた子どもは成績も高いです。これは当たり前です。そういう項目がここに並んでいます。

○山脇教育長 ここを見させていただいて、考えていく方向性、授業等のことを考えていけば、そのところが見えてくるなど、ここで感じさせていただきました。

先ほどから出てる、子どもの意欲。結局、無解答率が高いところに反映されてきてしまっているんですが、先ほど、東條先生は、ある面では失敗を乗り越える必要性も言われたし、もう一つの面ではやり遂げた、やれたところも味わわせてやるところも必要であろうと思います。これが内発的動機づけという意味で、子ども自身がこれをやろう、こういうものを目指していきたいという意欲につながるようなことを考えていかなければいけない。

授業という場面に限ってみても、内発的動機づけによって次の活動につながってくるようなことを考えていかないといけない。いろんな場面で、そういうことは考えていかないといけないんじゃないかなと思います。一方通行だけでは、なかなか子どもたちにそれは育っていかないのではないかなと思います。

学校だけじゃなくて、いろんな場面で考える必要がある内容であるかなと感じたところであります。ヒントをたくさんいただきました。

○東條教育委員 貴重な資料を、どうもありがとうございます。たくさん示唆に富む内容をいただいたと思いますが、特に私が印象に残りましたのが25ページで、実際落とし込んでみたらCになってた。言語体験が浅い、薄いという表現をされていたと思います。このあたりはすごく印象に残ったところでして、言語体験が薄いと、我々の領域で言いますと、例えば、暴力行為であるとか、不登校であるとか、自分の感じていることをうまく表現できないことが不手際につながるケースが多くありますので、そういうほうにもつながっているんだろうなど。

相関的な関係があると説明資料でありました。そのことをつなぐキーワードの1つとして、このあたりがあるんだと改めて確認できたということで、貴重な資料だと思いました。どうもありがとうございます。

○大森市長 時間が参りましたので、このあたりできょうの会議は終わらせていただきます。ベネッセさん、本当にどうもありがとうございました。

特にモチベーション、そこの話題が随分出てきたので、またその資料は教えていただければと思います。

次回会議ですが、今回までは全体を俯瞰するという資料でございます。少しテーマを絞りながら議論を深めてまいりたいと思います。先に皆さんから、この会議にお招きすべき有識者についてお知らせをいただきました。そういった方々の御意見とか、また教育現場の声もお聞きしたいと思います。きょうの資料、教育委員会を中心として事務局でも少しまた分析をしておいていただければと思います。

以上で、きょうの会議を終わらせていただきたいと思います。事務局、最後に少しコメントをお願いいたします。

○司会 次回の会議は夏ごろに開催したいと考えておりますので、ただいま御指摘いただきましたことも踏まえまして、資料を準備させていただきたいと思います。次回会議の日程につきましては、また別途お知らせをさせていただきたいと考えております。

以上で、平成27年度第2回岡山市総合教育会議を閉会いたします。
お疲れさまでした。ありがとうございました。